

民主島根

2021年
4.11
第1382号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

松江・出雲あわせ聴衆280人 4月の政治戦、総選挙での党躍進を 山添参院議員、大平前衆議から迎えまちかど演説

日本共産党の山添拓参院議員は4日、出雲市と松江市で街頭演説し、各地で懸念されているコロナ感染の再拡大について「今、一番問われているのは国民の気の緩みではなく、対策を緩めてきた政府の責任だ」と指摘し、一つひとつの地方選で勝利し、菅政権に審判を下していこうと呼びかけました。

雨の中、「頑張れ」との声援も送られました。山添氏はPCR検査の拡充が自治体任せだとし、「だったら、自治体の責任できちんとやれるよう、検査の拡充を一貫して求めてきた共産党を押し上げてほしい」と力説。コロナ禍でも医療や介護など国民の負担をさらに増やす菅政権について「こう

いう自民党政治は国政でも地方政治でも根本から改めるべきときだ」と述べ、野党共闘による政権交代に向けて共産党を躍進させてほしいと訴えました。

大平よしのぶ前衆議院議員・衆院中国ブロック比例代表予定候補は、中国電力島根原発2号機の再稼働が狙われているとし、「再稼働を許さず、原発ゼロの日本への審判を下そう」と呼びかけました。

山添、大平の両氏は同日、出雲市でも宣伝し、女性現職、男性新人とともに訴えました。

松江市では、11日からスタートする政治選に挑む女性前市議が力強く訴え。男性現職・新人、女性新人の3氏もそれぞれ決意表明しました。

また、1日に松江市島根町加賀の漁業集落で発生した火災の「街頭救援募金」にも取り組み、参加者から多くの募金が寄せられました。



共産党の値打ちについて訴える山添氏（中央）（松江市）



雨の中、山添、大平両氏らの訴えに聴き入る参加者（出雲市）

松江の政治戦勝利へ 4月15日(木) 仁比聡平 前参院議員 が応援に駆けつけ、街頭から訴えます。



田食みちひろ (現)



川西あきのり (現)



日高やえみ (新)



奮闘しています。

邑南町(定数13)

日本共産党は日高やえみ氏(67)と新IIが4年前に失った党議席の空白克服に挑みます。15人が立候補予定で激戦とみられています。

日高氏は、広島市生まれで被爆2世の日高候補は2014年、夫の退職を機に邑南町へ。看護師として町社会福祉協議会のデイサービスで働いた経験を持ちます。コロナ禍だからこそ「人にやさしい町を」と訴え、新型コロナウイルス対策など命と暮らしを支える政策を充実するよう求めています。

日高氏は▽国保税、介護保険料の負担軽減▽高校卒業までの医療費無料化▽医療機関への財政支援とPCR等検査体制の強化▽高齢者の交通手段の確保などの公約を掲げています。

加入者1人あたり10万円を超える基金(約3億円)を活用し、国保税を引き下げるよう何度も要求。町は2018年、ついに引き下げを決断し、3年計画で1億円強の基金を取り崩して引き下げることになりました。また、小中学校普通教室やランチルームへのエアコン設置も実現。「米の生産費を償う価格下支え制度を求める請願」(2018年3月)は、保守系無所属や公明らが反対する中、党町議団のみ採択を主張しました。

川西、田食の両氏は▽国保税の引き下げ▽高校卒業までの医療費無料化▽医療機関への財政支援とPCR等検査体制の強化▽高齢者の交通手段の確保などの公約を掲げています。

「こないだどぶ川にも、花が咲くねんな」。奉公の年季が明けた千代が道頓堀を去る時、新天地に向かう舟から、夜の街灯の映る川面を見てつぶやいた。朝ドラ「おちよん」のヒロイン杉咲花の好きなシーンだという▼モデルの浪花千栄子は戦後、松竹新喜劇の舞台、ラジオ、映画、テレビで活躍した上方女優。河内の貧しい家で生まれ、8歳で道頓堀の仕出屋へ奉公に。ドラマとは違い「台所の排水口の米粒を食べるような屈辱を味わった」と自伝に記している▼学校にも行けず文字が読めなかった千栄子は、包み紙の新聞紙で文字を覚えようとするが、主人に見つかり折檻される。それでも、持ち前の向上心から、新聞を便所に持ち込んで文字を覚えた。杉咲は、千栄子の「私の半生はどぶ川の泥水だった」との自伝を読んで、まさにどぶ川から這い上がるたくましい役作りを心がけた▼朝ドラは戦後編へと入った。実際の千栄子は、戦災からの復興の中で、戦前から劇団で苦勞を共にしてきた夫、渋谷天外の不倫に遭い、離婚へ追い込まれる。しかし、天外への怒りと恨みをバネに、女優としての真骨頂を發揮していく。その芸風は「浪花のおかあさん」と呼ばれる名脇役として好評を博した▼まさに主役が太陽なら、脇役は月。ドラマでも、飲んだくれの父親に見捨てられた千代が、満月を見て亡き母への想いを馳せる場面が登場する。その父も、月光が差し込む留置場で「ちよ、お前はほんまにお月さんみたいやね」とつぶやきながら息を引き取る。月は、闇夜を照らす女優人生そのものだった。